

山梨県小菅村における狩猟文化と地域環境

井村 礼恵

東京農工大学大学院農学研究科

はじめに

全国的に狩猟者は減少傾向にある。しかし、近年において増加する耕作地と山林に対する獣害への対策としての狩猟、そして狩猟文化が地域内で伝承してきた伝統智の継承が果たす役割は大きい。特に山村においては、地域の地形・風土・生態について、狩猟採集をする行為によって得られる知識は価値ある地域内で伝承されるべきものである。

これまでに、民俗学や民族学において、千葉徳爾や梅棹忠夫、直良信夫などが国際的な狩猟文化と農耕文化の比較、日本国内での狩猟文化の調査・研究を報告している。小菅村の狩猟文化については『小菅村郷土小誌』に享保 15 年の記録の紹介と明治大正時代の狩猟の歴史が記されている。これらの狩猟文化の先行研究の上に、山梨県小菅村というひとつの山村地域における狩猟文化の近過去および現状を調査報告する。

調査の概要

山梨県北都留郡小菅村は、面積を大きく占める山林は水源林となっている。この地域の主要な山岳は大菩薩嶺 (2,057m)、三頭山 (1,528 m) などである。村の人口は平成 17 年 3 月末現在 987 人、世帯数は 357 世帯である。現在、村内に狩猟を生業としている者はいない。小菅村の猟期は 11 月 15 日から 2 月 15 日までである。平成 16 年度現在、小菅では「網・わな猟免許」の登録者は 3 名、「第一種銃猟免許」の登録者は 32 名である。現在の狩猟文化の内容及び歴史的変容を調査した。聞き取り調査を主として、参与観察も行った。期間は平成 16 年 4 月から平成 17 年 3 月まで、調査対象者は小菅猟友会の会員を中心とした村民である。

調査結果

1) 鉄砲撃ち

小菅では、狩猟をする人を「鉄砲撃ち (テッポウブチ)」と呼ぶ。戦前は買われていたウサギが貴重なたんぱく源として栄養を補ったが、戦後の食糧難の時にはヤマドリ・ウサギ・イノシシを撃って、食を助け貴重なタンパク源だった。シカは戦後は売って現金にしていたので、自分では肉は食べられなかった。そのため、内臓や骨の髄まで押し出して食べた。山鳥も収入源としていたので、食べていなかった。昭和 30 年代は小菅の村民は、炭焼きや農業を主にしていた。植林やキリカエバタによって、動物達のエサが減少傾向にあり獣害も増加した。そのため、現金収入を得る目的と同時に有害駆除のために、鉄砲撃ちは増えた。昭和 40 年頃には鉄砲撃ちは 150 人ほどいた。昭和 50 年には鉄砲撃ちは 80 人ほどになった。減少したとはいえ、まだその頃は村内の各集落ごとにグループをつくり、大物撃ちをしていた。現在、山梨県北都留小菅分会には、32 人の狩猟登録者がおり、集落が近いもの同士が集まった大物グループが 2 つある。そのグループを「大物クラブ」と呼ぶ。イノシシ・シカなどの大物猟は 10 名ほどの人数で、猟犬を 3 から 4 頭使って行う。

小菅村の狩猟家酒井嵩氏の「食わないなら、撃つじゃねえ」という言葉や、「自分の家では、砕けた肉を食って、人にはいい所をやるだよ」という青柳一夫氏の言葉は、「地域内生態が循環」「交換の法則」が存在している山村社会の生活の価値観そのものを表すものであり、小菅の鉄砲撃ちの伝承がいかなるものであるかを示すものでもある。

2) 獣害

山林と耕作地への獣害は増加している。山林においては、登山道の木製の標識をシカが角を研ぐことに使って字が読めなくなったり、樹木

の新芽を食い尽くしてしまい樹木の成長を妨げている。耕作地への被害としては、小菅において多くの村民が栽培しているトウモロコシはハクビシン等の被害が大きい。ハクビシンは一晩で一区画分の耕作地のトウモロコシを全てを食い荒らすこともある。良く実っているものを選び、多くの実を少しずつかじるので、害を受ける面積が大きい。ワサビへの獣害もある。山鳥・シカ・ウサギなどはワサビの葉・茎を食べる。芯まで食べきるのはシカである。ワサビの沢にいる沢カニを食べるために、ワサビの苗を抜いて駄目にしてしまうのは、イノシシやサルである。ドングリがない年は、ワサビへの害が大きい。近年、小菅に来るカワウも増加傾向にある。カワウは養魚場の魚を大量に食べてしまうため、問題となっている。

これらの獣害対策として有害駆除が行われている。有害駆除は年中、時期に関わらず、獣害があった時に被害を受けた個人が JA か村役場に申し出て、村長名で依頼された経験のある猟師が行う。

3) 狩猟鳥獣の生態

鉄砲撃ちは獲物が獲れる獲れないを「エサったけのものだ」と言うことがある。これはエサがあるところに動物は集まるの意である。エサの有無、つまり自然界の状況によって、獲物がある年や場所とそうでない年と場所がある。キノコがあまり生えない年は狩猟もあまり獲れない。天候が生態に大きく関係あることを表している言葉でもある。鉄砲撃ちは、猟期以外にも、一年を通して、有害駆除や川釣り、山菜採り、キノコ採りなどで山林や溪流に入り、その山林内の生態を観察し熟知している。

現在、小菅村で主に狩猟対象となっている鳥獣は山鳥、キジ、ツキノワグマ（山梨県では年間捕獲数を制限している）、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、キツネ、テン、ハクビシンである。小菅郷土小誌によると、村の猟の状況は明治の終わりから大正、昭和の戦前までは主としてノウサギや雉、山鳥などで大物といわれたシカ、クマ、イノシシなどは1年に数等というわずかな数であったという。ブナの実が多くなった年はイノシシに脂がのり、肉がおいしいと言われている。

4) シリッカワ

服装は、滑落、寒さ、マムシなどに備えたものである。そのなかでも、鉄砲撃ち特有の着装具として、「シリッカワ（尻皮）」がある。雪の中で腰を下ろすことが多いので、「シリッカワ（尻皮）」と呼ばれる毛皮の腰当てを使用している人が多い。カモシカの毛皮で作られたものが最も良いとされる。水分を弾き、毛の密度が濃く保温性にも優れている。しかし、現在は非狩猟獣であるため、手に入りにくい。そのため、クマやシカのものを使うことが多い。クマの毛皮で作られたものは軽く毛が柔らかいが、耐久性に優れ磨耗に強い。シカのもは毛が抜けやすく保温性も弱く、摩擦にも弱い。

5) 銃による大物撃ち猟の方法

狩猟の仕方は、獲物によって2種類ある。山鳥などの鳥類や小動物などを獲物とする場合には、1人の鉄砲撃ちが1~2頭の猟犬を連れて猟をする。イノシシやシカなどの大型獣を獲物とする場合には、数人の鉄砲撃ちが数頭の猟犬を使ってグループ猟を行う。グループ猟を行う際の役割の呼び方として、トバの方から猟犬とともに獲物を追う役を「セコ（勢子）」「犬かけ」、オキの方で獲物が来るのを待ち撃つ役を「ウチテ（撃手）」もしくは「マチ」という。ウチテが待つ場所を「タツマ」と呼ぶ。

犬を放す前に、みんなで獲物のいると思われる場所を歩き、足跡や枝の折れた跡など、動物の動きを確認する。この作業を「見切り」という。雨や雪が降った後は、足跡が残り、そこを通った獲物の種類や時間帯、方向などを判断しやすい。風の強い日は動物の気配や足音等が感じられないので、狩猟日としてはあまり適さない。登山道は踏み固められているので、獲物の足跡が付きにくい。そのため、登山道を離れ歩くことがほとんどである。足跡の確認とともに、鳥の飛び立つ羽音や、草や木の揺れ等の物音に対して敏感にし、動物の動きを察知する。

タツマは木の陰に隠れて、獲物から身を隠すようにする。原則、風下にいるようにして、獲物に気取られないようにする。タツマに長時間いると寒いので、火を燃すときには枝を燃してオキにし、煙を出さないようにする。火を燃す

時に、ダケカンバの樹皮を用いて、燃料とすることが昔から行われている。乾燥していて、油質でよく燃える。

6) 調理

解体後、内臓は猟師宿ですぐに調理される。イノシシとシカの内臓は大根と一緒に醤油、酒、砂糖で甘辛くモツ煮にされる。イノシシとシカの心臓は山の神に供えた後で、ニラやニンニクなど一緒に醤油と砂糖などで甘辛く煮て「モツ鍋」にして食べられることが多い。

シカミノ袋(胃袋)はササやドングリがたくさん入っている。それを丁寧に洗い、刺身にして、醤油とワサビで食べる。シカ肉は生で刺身で食べるが最もおいしい食べ方といわれることが多いが、イノシシとシカの肉を茹でたものに、醤油とニンニクやショウガをつけて食べるのもおいしい。イノシシ肉の炭火焼は、塩コショウ味が最も多いが、人によっては味噌ダレ(味噌・ニンニク・唐辛子・砂糖)をつけることもある。イノシシは、おじや(イノシシ肉・大根・ジャガイモ・味噌・長ネギ・米)や、うどんなどにもされる。また、「とれない猟師は皮をもらってきた方がいい」という位、皮についているヨロイと呼ばれている脂身はおいしい。ヨロイと毛皮を切り離し、水から小さく切ったヨロイを茹でる。それを、醤油・味の素・ワサビ・長ねぎで味をつけながら食べる。昔は、イノシシのオス・メスの味の違いはさほど無かったが、今はメスの方がよく脂がのっついておいしいといわれる。

現在ではなかなか手に入りにくいですが、山鳥は、すき焼き、刺身(胸肉)、オジヤ(白菜と肉を醤油ベースの味付けで煮て作る)にして食べられる。クマ肉はすき焼き風に調理をして食べられる。また、近年食べられることはなくなったが、ウサギは昭和50年頃まで小菅の正月に欠かせないもので、お吸い物に入れられた。また、結婚式でもウサギ肉の刺身は必ず出されるものだった。ウサギは、おじや(ゴボウ・長ネギ・丸麦か押し麦・醤油)にすることも多かった。

7) 利用

昭和20年代にはムササビの毛皮で大きな現金収入を得ることができた。襟巻きとして、フ

ランスに輸出することもあった。特に多かった小金沢での猟の場合、4~5人ほどで数日山にこもることもあり、「ミッカヤマ(三日山)」「イツカヤマ(五日山)」と言われていた。山へ入る日数は縁起をかつぎ、奇数日間であった。この猟のために、小金沢には「甲州小屋」と呼ばれる小さな非難小屋が小菅の鉄砲撃ちによって建てられ、昭和20年後半まで存在していた。戦時中には、ムササビ(バンドリ)やウサギの毛を軍隊の耳あて用に供出していた。昭和30年初め頃、テンの毛皮1枚は米1俵もしくは炭焼き1回分とほぼ同じ値段で売れた。そのため、「金を人に借りるよりも、小金沢(=地名)に行った方が早い(小金沢にテンを獲りに行ってきた方が早く金になるの意)」とも言われていた。毛皮の加工としては一次加工までしか村内ではしなかった。対象となった動物はムササビ、キツネ、タヌキ、テン、シカであった。

クマの毛皮はなめして、敷物やシリッカワなどにされるが、県内のクマ捕獲数制限のために現在ではほとんど獲ることはない。イノシシの皮は若い犬の訓練用として、においを覚えさせるために使われている。シカの皮は売ることもあるが、ほとんど使われていない。

シカの角は良いものは売ったり、自分でナイフやナタの柄にする人もいる。また、イノシシの牙も大きいものは撃った人が持ち帰りキーホルダーなどの装飾品として使用される。

イノシシの鼻を形のまま乾燥させたものが「寝つきの薬」と言われ、寝つきのお守りとして明治・大正まで持っている人もいた。これは、夢を食べる獺の話からきたものようだ。

クマとイノシシの胆のうは乾燥させて、胃腸の薬として用いられる。特にクマの胆のうはかなり希少価値があり高価である。サル胆のうは目薬として利用される。胆のうを干して削り粉末にし、湯に溶かしたものを直接点眼する。ボヤ(枝)で目を傷つけた場合や花粉症に効くと言われている。

8) 信仰

「山の神」は、女性の神と信じられている。そのため、女の人が山に入ると、神様がヤキモチを焼くので良くないとされ、さらに山が穢れると言われている。狩猟に出かけるときに、山の

神に祈る。神棚もしくは高い所にお神酒を供え出かける。クマやイノシシ、シカなどの大型獣が獲れた時は、心臓を3つに割って切込みを入れ、「山の神」にお神酒とともに供える。小菅では祝い事には奇数が良いとされている。その供えた心臓は猟師宿のものになる。

戦前は、11月21日に狩場という場所にある「山の神」の祠に、小菅の猟師全員でお参りに行った。その際には「オカラク」と呼ばれるワラに包まれた米団子を供えた。現在ではその慣習は残っていない。

小菅内の小永田地区では氏神様が熊野神社であり、クマは信仰の対象であるために、現在もなおクマを獲ることはしない。小永田の者がクマを獲った場合には神様の怒りに触れ、たたりがあると信じられている。

おわりに

現状の中、農耕文化よりも古くから人類の営みとして行われてきた狩猟採集の現代的な存在意義を再考察する必要がある。環境省によれば、狩猟の意義や役割は、①趣味としての楽しみ②自然資源の持続的利用③農林水産被害の予防④日本在来種の保護、があげられている。現在、シカやイノシシなど野生生物の農作物や山林への害が大きい。イノシシとシカの多産や一夫多妻性などの生態を考慮しても、水源林の管理と農耕を継続するためには生息数のコントロールを人為的にしていく狩猟という行為は不可欠である。また、地域の生態を知りえた質の高い狩猟家の育成することは、地域環境を熟知する小菅人の育成とも関わる。今後、狩猟文化が源流の里のアイデンティティのひとつとして、その伝承価値が評価され、小菅の地域づくりが促進されることを期待する。

謝辞

ご協力をいただきました小菅猟友会の皆様には、ご多忙中お時間をいただき、どうもありがとうございました。一層のご発展をされますことをお祈り申し上げます。

参考文献

守重保作編 (1983) 『小菅郷土小誌』 小菅村
大日本猟友会 (2003) 『狩猟読本』 大成出版社

千葉徳爾 (1990) 『狩猟伝承研究 補遺篇』 風間書房

直良信夫 (1968) 『ものと人間の文化史 2・狩猟』 法政大学出版局